



第三章 きょうだい関係
——子どもどうしの共同生活——

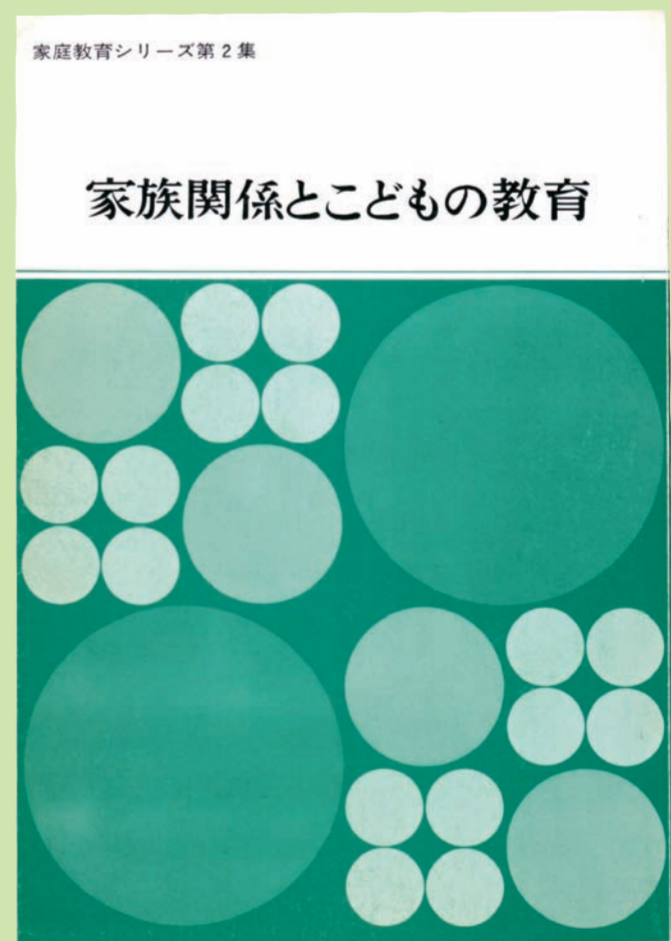
家族計画と子どもの数 戦前までは、五、六人の子どもを育ててのが家族のふつうの姿でしたが、最近では、二人の子どもを育てる家族がふつうになっています。もちろん、二人の子どもを育てる家族」というのは平均的な家族の姿で、現実には三人の子どもを育てている家族も、一人しか育てていない家族もあります。このように家族のなかの子ども数が少なく

来を考えあわせて、自分たちで責任をもって育てられる範囲内で子どもを産むようになっていきます。

子どもの数が少なければ少ないほど、親の経済的負担は軽く、生まれた子どもにじゅうぶんなことがしてやれるという考えが支配的になっているようです。しかし、子どもの立場からみると、きょうだいがいって、子どもどうしの共同生活を体験することはきわめて重要です。きょうだい関係が、子どもにとってどのような意味をもっているか、そして親はそれをどう考慮すべきか、という問題をとりあげてみましょう。

一ひとりっ子と長子

はじめてのことば 夫婦のあいだにはじめての子どもが生まれるということは、いいかえれば、おとなだけの家族のなかにはじめて子どもが参加してくるということです。むかしは、祖母と同居したり親戚や隣人と親密に交際していたので、はじめての子どもが生まれて来ても、周囲の経験者から保育について助言や協力をじゅうぶん受けることができました。しかし、最近の核家族の親は、はじめての子どもを育てるのにとまどい、適切な助言や協力があま



家庭教育シリーズ全 28 冊

1966 (昭和41) 年～1980 (昭和55) 年

家庭教育学級の教材として無償で配付。乳幼児の栄養から学童期のしつけ、青年の進路問題など多様なテーマについて、第一人者が執筆している。

下：同シリーズ第2集「家族関係とこどもの教育」より

1968 (昭和43) 年